

この天心祭について西大由氏は面白い話をして下さった。それによると、もともとの発案者は松本博臣（末田利一の実弟）で、彼は血気にはやる男であった。昭和十年に彫金部予科に入学したが、清水南山と喧嘩して退学。兵役に就き、帰ってから丸山不忘の家で鋳物を学んで一人前となった。昭和十六年、西大由氏と一緒に鋳金部を受験して落ち、翌十七年に入学を果たした。入学したばかりのとき、彼は天心祭をやらねばならぬと主張し、有志に働きかけて遂に挙行した。当日、日本美術院などからも人が来て、銅像の前で玉串奉奠となったとき、澤田源一校長も参加しようとしたが、「あなたはダメ」と言って松本が拒絶したため、校長は帰ってしまったという。恐らく松本は学校としての天心祭挙行を校長に提案して拒否されたため、このような挙に出たのだろう。

天心祭は翌十八年には挙行された形跡が無く、十九年九月二日の天心の命日に、再び生徒たちの希望により挙行されている。戦局が日に日に悪化する中で、生徒たちは天心の思想に精神的拠り所を求めようとしたのかも知れない。

⑰ 配属将校への抵抗

「これは編者の依頼によって昭和十七年工芸科鋳金部卒業の伊藤豊氏が寄せられた回想記である。」（平成七年十月）

「いい学校だったなあ」というのは、我々美術学校卒業生が旧懐をあたためる中での一コマである。仕事（勉強のことを「仕事」と言う風習があった）のことになると結構ガツガツしたものが、その他モロモロは極めてノンキに構えていたものだ。学校に顔を出す

にも、先ずゆきつけの喫茶店で眠気さましのコーヒー。出来るだけゆっくりねばって召上る。それからおもむろに校門をくぐるのだが、どなたも遅刻を遅刻と心得ていない。当然課題の時間が足りなくなるから、帰途につく頃は夕暮れのせまる頃だ。校門を出たところに東京市初期のアンティークなガス灯が何基かあって、市のオジサンが長い柄の点火棒で火を入れてまわっているのを見ながら山を降りた。ガス灯のマントルは点火してから高輝度まで、タイムラグがある。薄いミルク色の夕靄の中で青白いガスの炎が明るさを増してゆく。如何にも優雅な演出であった。

しかしながら当時の世界情勢は第二次世界大戦へとひた走りに走り続けていたのである。昭和十一年、あの大雪の中で二、二六事件が勃発、首都圏は騒然となった。ノンキを極め込んでいた美校生たちも流石に軍ファッショのキナ臭さを軍靴のひびきの中から嗅ぎ取らざるを得なかった。その決定的な事件が繰り上げ卒業である。我々は五年で卒業のところ、最終の一年を半分削られてしまった。本来、卒業制作は一年かかりきりであったのが半分になったのでは十分な「仕事」になる訳がない。おまけに九月という残暑のさかりに卒業というなんとも妙なことになってしまった。入学当初から心に留めていた卒業制作は、軍部の兵員増強という政策の前にひねりつぶされてしまったのだ。学生有志で大挙して文部省にかけ合うか、なぞと話が出るが、国政の権力をすべて手中にしているのが軍部であれば到底打開の道なぞあり得ない。忿懣やる方なさを胸に秘めて、削り取られた空隙を埋めようと卒業制作の期間ばかりは寸暇を惜しんだ。当然のことながら軍事教練の時間はサボりにサボった。

昭和十七年当時、東京美術学校には陸軍大佐、大尉各一名が配属されていた。陸軍大佐といえば聯隊長、いわば一軍の将、海軍であれば戦艦の艦長、所謂高級将校である。その高級が学生に号令をかけるのだが、学生にしてみれば前述の次第であるから真面目にやる気なぞある訳がない。然しながら軍人さんにしてみればそれは大変なことである。第一満足な「なり」をしているのは何人もいない。

カーキ色の教練服は着用はしているが授業時間に作業着に使うから絵具、粘土、石膏等々でドロドロ、イッチョラの靴はもったいないからとハダシの奴もいる。高齒の下駄履きはなんのつもりなのか？ その下駄の鼻緒はワラ縄、すぐ切れてしまう！ 成程。ゲートルは着用し及んではいても二人で仲良く一本ずつ巻いている。こんな諸君が整列するとどう鼻肩めに見ても敗残兵部隊。軍人さんは激怒する！ 一人一人つかまえて何やら叫ぶのだが、あまり大勢だからキリがつかない。あきらめて中止という場面もしばしば。

ところが大问题がもち上った。配属将校からの断髪令である。美校生の長髪は自他共に認める良俗と心得ている。現在男性の長髪は当りまえの風俗となっているが半世紀以上も前に美術学校の学生は学風？ として男子の長髪を定着させていた。その功績をナンと心得るのか！ 美的センスのカケラもない軍人メ！ と拳骨を振り上げてみてもどうにもならない。忿懣はつのであるばかり。鬱憤晴らしに軍事教練では益々珍妙なスタイルを工夫する、軍人さんは怒り出すという悪循環。ろくなことにならない。卒業式当日、卒業生全員で記念写真を撮る。それを今あらためて調べてみると、かなりの人数が丸坊主ではない。といっても長髪でもないが、反抗族が健在であ

ったことが分かる。そんな中で何年何月であったかは定かではないが大事件が起きた。軍事教練の時間、何かにつけて豊田大尉にじめられていた学生某が、その日は大尉に向かって反抗の姿勢をあらさまにした。怒った大尉は腰の佩刀を引抜いて某君を威嚇した。

堪えかねた某君は大尉に飛びついて佩刀を奪い取り、いきなり切りつけた。大尉は驚いて校庭中を逃げ回る。級友が某君を抱き止めたのだが、剣道の心得が可成りあったと思われる某君は、もっぱら足を払い払い追いかけた。殺害の意志のないことがはっきり分ったとは当時居合せた学生の話であるが、僕は二分後になってそう聞いたのである。同級生たちは某君を案じて自発的に緘口令をしいて、事件は学外に漏れることなく無事であったのだが、それは奇跡といつて良いだろう。この事件が表沙汰になっていたら身の毛のよだつような結末が想像されたのであった。

昭和十七年、卒業式に先きだつてのある日、主任教授の高村先生から教官室に呼ばれた。

「伊藤君は軍事教練をだいぶ欠席したんだね。それに断髪令に違反しているのかね」

「はあ、五糧位です」

「五糧じゃ坊主頭とは言えないね」

「教練の出席率は満たしていると思います」

「まあそれはそれとして、三橋大佐がね、伊藤君には卒業資格を与えないでもらいたい、と言って来ているんだよ。僕はね……この学校は芸術家を育てるところだ。軍人を教育する学校ではない。軍事教練が不合格だから学業を不合格にするという訳には参らない。

貴方の御申出はお断りします、と云ってある」

僕はまさに晴天の霹靂、仰天した!! 昭和十七年という時代の背景は太平洋戦争の真ッ只中、あらためて考えるまでもない、軍ファッショ万能の時代である。国立の学校という「公」の場で軍から派遣されている現役の陸軍大佐に正面から刃向かえばどんなことになるのか! たちまち憲兵隊の手が伸びても至極当然の成り行きと考えなければならぬ。敗戦後のあるとき、戦時中の軍の事情を良く識る人にこの話をしたところ、

「高村先生という方は凄味のある方だったのですね。それはね、まさに命がけであつたと言えます。御自分の信念の為に真ッ正面向から高級軍人と向い合つて、美術学校の教務に介入を許さなかつたのですね。美術学校の歴史の一頁を飾る事件であつたと言えるでしょう」

と言われた。当時の日本国民の中で、このように軍ファッショに正面向から立ち向える人物が果して何人いたであらうか。

僕はその時点で卒業はあきらめた。一年留年すればそれだけ勉強ができる。開き直りという訳ではないが、そう自分に言いきかせるより路はない。卒業は来年ということではよいが、高村先生は大丈夫だろうか! 唯それだけで頭がいっぱいだった。二、三日後は卒業式というある日のお昼頃であつたか、丸山教授に一寸室まで、と呼びされた。いよいよ引導をいただくかと教官室に向かう。先生は開口一番、「君の卒業制作を学校で買上げることが決まつた」と言われる。一瞬、ハテ、何か聞き間違えたかな? と思わず先生のお顔を窺つた。「高村先生は……」と喉から出かかつたのを飲み込んだ。

「それからね、式当日は代表で卒業証書を受け取るのだから服装には十分気をつけて。それだけ……。良かったね、おめでとう」

と言われた。狐につままれたような、とはこういうことなのか。

「お世話になりました」という一言がやつとで一礼して廊下に出たが、思わず走り出したのを憶えている。走りついたところは彫刻の参考品陳列室。思わずガッタメラタの騎馬像を見上げていた。「やあ久しぶりだね、ガッタメラタ君」と見上げた騎馬像はいつもより光り輝いていた。そのときフト思い当つた。「ああそうだったのか! 高村、丸山、内藤の三先生は一つだったのだ! あるいは?」

東京美術学校の教授会が一つだったのか!」と。あの軍ファッショの時代、学内でどんなことが起きていたのか、僕は僕の身近なことしか分かつていないが、その極めて狭い身辺ですら、学生が抜き身の軍刀で軍人を追いかけて回り、また、教務に介入して来た高級将校を教授がハネのけるなどという事件があつたことは、美術学校が軍に抵抗の姿勢を如何に強く持っていたかということの現われであつて、永く学史に記録すべきことであらう。

高村教授が僕に軍人と教務の事情を話されたときのことを思い出すと涙が出る。それは無事卒業させて戴いたということではない。教務に介入してきた軍人の横暴を毅然として払いのけられたその崇高な先生の在りし日の誇り高い姿を偲べばこそである。昭和四十二年、そのやむにやまれぬ気持を託して「高村豊周先生像(頭像ブロンズレリーフ)」を制作、日展四科に出品した。今、その像は、いづれ定置されるであろう日を心待ちにしながらアトリエの庭で陽を浴びている。